SDGsの視点からICTを活用して
国内外の課題解決を考察する授業改善の取組み

明治大学 情報コミュニケーション学部 准教授 川島 高峰（かわしま たかね）

アクティブ・ラーニングとは？

従来の教育・教養のあり方への反省から登場した
学生の自主性・自発性の育成を重視した様々な教育手法

概念形成の背景には共通性があるが、教育手法そのものは多様で定義は困難
狭義に定義すること自体がアクティブ性の否定になるのではないだろうか

※「従来の教育教養のあり方」については参考資料をご覧ください

取り組み事例　1

ベトナムとの国際協働調査・国際協働映像制作　2014年度より毎年

外務大臣賞受賞に際して

明治大学　情報コミュニケーション学部　政治学博士　准教授 川島 高峰

「ベトナム・ハノイ地区におけるメディア・コンテンツの動向調査並びに日越学生による国際共同制作」（Tokyo-Hanoi Media Culture Collaboration代表　明治大学情報コミュニケーション学部准教授　川島高峰）が外務省「日本と国連の将来　動画メッセージコンクール」で外務大臣賞を受賞されました。川島氏より受賞コメントを寄稿して頂きました。

受賞した明治大学情報コミュニケーション学部
「水と衛生取材班」のメンバー　左端が川島准教授

動画の詳細はこちら: https://compe.japandesign.ne.jp/kokuren60-message/result/index.html

- 平成27（2015）年度　放送文化基金採択、構想名「ベトナム・ハノイ地区におけるメディア・コンテンツの動向調査並びに日越学生による国際共同制作」→外務省「日本と国連の将来　動画メッセージコンクール」外務大臣賞受賞
- 学生支援機構奨学金採択事業

取り組み事例　１－２

アクティブ・ラーニングでアクティブ・ラーニングを養う　コンペに挑戦

北日本新聞

（第3種郵便物認可）

留学生 芦峅寺の文化体験

明大生の企画が実現

立山町インカレコンペ最優秀

昨年の立山町インターカレッジコンペティションで最優秀賞を受けた明治大による「留学生研修プログラム」が16日、同町芦峅寺の立山博物館で始まった。ベトナム人を中心とした留学生12人、同大の学生18人が立山について学んだ。18日までグリーンパーク吉峰を拠点に2泊3日で、芦峅寺に伝わる食や信仰などを体験する。

加藤学芸員（左）の解説を聞く留学生ら

昨年のコンペでは明治大情報コミュニケーション学部の川島高峰准教授に学ぶ3年生が立山町独自の文化に着目し、日本文化に興味がある留学生を通じて世界に発信しようと企画。同学部が実施している「ベトナム短期留学プログラム」を活用する内容で提案した。町は5月に同学部と地域連携協定を締結し、今回のプログラム実現につながった。

初日は立山博物館の加藤基樹学芸員が案内。立山の豊かな自然、水の恵みや怖さ、地獄谷に象徴される厳しい自然景観に育まれた信仰などを丁寧に解説した。ハノイ大のゲン・ジェウ・フォンさん（21）は「立山では地獄の存在が身近だと感じた」と言い、ハノイ国家大学外国語大のクエン・バン・アインさん（19）は「車窓から見る景色が美しい」と感動していた。

ベトナムは親日国として知られ、会員制交流サイト（SNS）の利用が盛ん。明治大リーダーの木下友貴さん（20）は「アルペンルートだけでなく麓にも魅力があることを広めたい」と話した。

富山　富山市岩瀬地区に伝わる民謡「岩瀬まだら」の市無形民俗文化財指定記念祝賀会が16日、同市のホテルグランテラス富山で開かれ、地元関係者ら約250人が喜び合った。

岩瀬まだら保存会が歌、地

た。出席者は郷土料理に舌鼓に懇談した。保存会名誉会長の花柳松香さんは「岩瀬まだらを大切に守り伝えていきたい」と謝辞を述べた。

黒部　黒部市教育委員会は16日、黒部川扇状地扇頂部にかつて架けられていた愛本刎橋の柱脚設置跡に

- 平成28（2016）年度　立山町インターカレッジ・コンペチション　学生提案「「文化体験の町～立山～　山岳信仰と立山曼荼羅を巡る」・観光国際化実験事業としての留学生の利活用
- 学生支援機構奨学金採択

取り組み事例　２－１

タイ・バンコクでの模擬学生国際会議　持続可能な都市開発について

- 平成28年（2016年度）「大学の世界展開力強化事業～アジア諸国等との大学間交流の枠組み強化～　タイプB（ASEAN地域における大学間交流の推進）」に採択、プログラム構想名「CLMVの持続可能な都市社会を支える共創的教育システムの創造」
- 学生支援機構奨学金採択

取り組み事例　２－２

カンボジアの小学校　持続可能な支援についての研修

- 平成28（2016）年度文部科学省「大学の世界展開力強化事業～アジア諸国等との大学間交流の枠組み強化～　タイプB（ASEAN地域における大学間交流の推進）」採択、構想名「CLMVの持続可能な都市社会を支える共創的教育システムの創造」
- 学生支援機構奨学金採択

まとめ　アクティブ・ラーニングとは？

「学生の自主性・自発性の育成を重視した教育手法」の特徴

共同で試行錯誤できるような環境を学生に提供すること

協同的に考え、協働的に調査し、共同して報告する！

- 双方向性　教員ー学生間、学生間の双方において
- コーチング　ティーチングではなく
- 学際性　専門性ではなく、多分野間でのつながりの理解・その面白さの発見
- 社会性　社会人基礎力・世間知を養う
- 二つの外　教室外・想定外こそ学びのキャンパス

社会全体が、解のない問題と向き合わなければならない状況で、今後、アクティブ・ラーニングの必要性は高まると思う。導入に伴う混乱や短所は避けるべきではない。リスク回避社会がリスク回避型人材を育成しても、社会が直面しているリスクそのものへの対処にはならないのではないか。

参考、メモ

参考　「従来型の教育・教養のあり方」、その問題性とは　教育編

従来型　教員：教科書説明型、学生：聴講・ノート・テーキング型

- 若年世代のモチベーション低下、私語、集中力低下
- 受験勉強型とは異なる教育スタイルの欲求

従来型が想定した予習＋講義＋復習というPDCA的な方式

- 時間割編成が多教科化となり形骸化・形式化
- 予復習の文化がない
- 予復習を目的とした学生のたまり場が少ない

参考　「従来型の教育・教養のあり方」への疑問

大学受験の教養育成環境

- 家庭ー学校ー塾の三地点を螺旋状に回って大学入試に臨み入学する
- 社会空間の個室化・限定化・定例化
- ＳＮＳ等のネット環境による情報環境や人間関係のインナーネット化

大学受験型の競争文化

- 正答主義　単一問題に単一の正解を競う
- 即答主義　処理能力の速さを競う
- 想定主義　試験範囲は決まっていて、範囲を超えた質問はアンフェアー
- 室内主義　あらゆることは（世間・社会）は室内で完結している

〇〇大学クイズ王といったテレビ番組は現代型教養の人材観の象徴

偏差値的な「脳力」（記憶力・処理能力）の向上には限界があることを学生の多くは受験勉強を通じて体感的に理解している。大学受験型の学習・勉強に辟易しているのである。ともすると座学中心の従来型の大学講義に学生のモチベーションが上がらない原因がここにあるのだろう。いくらやる気を出してみても生まれ持った脳力（記憶力・処理能力）が向上するわけではない。車の性能が変わらないようなものであり、自己否定の連続になる。

メモ

- アクティブ・ラーニング（ＡＬ）でスマートフォンによるＩＣＴ活用は必須。国内外との遠隔コミュニケーション、情報シェア、移動しながらのプログラム実施が必要になるからである。情報インフラは国や国内でも場所により異なるという情報インフラの想定外への対応もリテラシーの一つである。
- 偏差値的な「脳力」（記憶力・処理能力）の向上には限界があることを学生の多くは受験勉強を通じて体感的に理解している。大学受験型の学習・勉強に辟易しているのである。ともすると座学中心の従来型の大学講義に学生のモチベーションが上がらない原因がここにあるのだろう。いくらやる気を出してみても生まれ持った脳力（記憶力・処理能力）が向上するわけではない。車の性能が変わらないようなものであり、自己否定の連続になる。
- 学生は、共同作業は、その成否や効率性について人間関係にとても左右されることを学ぶ。教科書がないというよりは、学生が教科書を創る、その作成を教員が支援するというイメージが重要である。
- 例外的・想定外の状況への耐性や対応力が強くなる。「うまくできる」ではなく「なんとかする」が身につく。
- 今日、想定している学士の教養課程を学生にとって自身の専門性の方向を模索するアクティブ・ラーニングの「過程」とし、学士の専門課程を従来の教養課程に、今日の学士の専門課程を大学院の修士課程と置き換えたほうが良いだろう。これまでの学士－博士前期－後期は大学大衆化以前のエリート養成機関としての大学を前提としており、実質、機能不全になっている。